

2022年1月6日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 守 一介
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） カリキュラム・マネジメント実践校における教師の協働の在り方と
児童の学習成果に関する事例研究
論文題目（英文） A Case Study of Teachers' Collaboration and Children's Learning
Outcomes in an Elementary School Practicing Curriculum Management

公開審査会

実施年月日・時間 2021年12月10日・13:00-14:30
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 117教室
オンラインシステム（ZOOM）の併用

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	尾澤 重知	博士（知識科学）	北陸先端科学技術大学院大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	西村 昭治	博士（人間科学）	大阪大学	情報科学
副査	早稲田大学・教授	保崎 則雄	Ph. D (Educational Communication)	The Ohio State University	教育工学
副査	早稲田大学・名誉教授	野嶋 栄一郎	博士（人間科学）	大阪大学	教育工学

論文審査委員会は、守一介氏による博士学位論文「カリキュラム・マネジメント実践校における教師の協働の在り方と児童の学習成果に関する事例研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：学校の複雑性は学校によって異なり、応用や汎用は難しい。対象校の児童の10年後や、異動した教師たちのその後についてどのようになっているか。

回答：それぞれに関する調査や研究は行えていない。しかし、本論文の調査の過程で研究者自身が得た情報はある。児童については、対象校の児童が卒業後、中学校において建設的な話し合いができていたり、リーダーシップを発揮していた

りして、評価が高いということである。また、異動した教師については、対象校のような仕組みが広がっていないという事実を鑑みれば、異動先の小学校の仕組みや文化に従っているということは考えられる。これらの点を検証するような研究についても検討したいと考えている。

1.2 コメント：私は40年以上対象校と関わっている。児童が能動的に話していくように促している点が対象校の特徴である。本論文については、データの取り方、妥当性の観点でも努力が認められ、Mercer (1996) のモデルをうまく活用している。コンピテンスベースで、学力テストによる評価ではなく、人間個人として学んだ成果をどのように使うか、に関して焦点をあてた点でも優れている。総じて、事実としてのデータを見せながら、学力テストとは異なる評価軸での成果を示すことができた。

1.3 質問：データが限定的だと述べていたが、対象校の実践は長い間続いており、コホート分析ができそうなくらいの長さである。対象校について保護者や教師がどのように考えているのか、といった視点などまだ宝があるように思う。

回答：対象校に対する保護者や教師の認識に関する調査や研究は行えていない。保護者が子どもを対象校に入学させたいと思うか、あるいは、教師が対象校の仕組みについてどのように感じているかといった視点での研究は今後検討していきたい。

1.4 質問：対象校から異動した教師が他の学校に仕組みを広げていかないとすれば、教師がシステムの中に埋め込まれているからではないか。学年主任の力量によるものではないということであれば、どのようなシステムが存在しているのか。

回答：教師が所属する学校の仕組みや文化にそって仕事をしているということは想定できる。対象校のような実践を行うためには、教育実践に関するデータの蓄積が必要である。蓄積されたデータを教師が協働的に活用する対象校のような仕組みがあって、学年主任が本論文の中で示したような役割を果たしている。他の学校で対象校のような実践ができない理由として、そういった仕組み、設備、データの蓄積がないことが想定される。

1.5 コメント：大学のバックアップがあったから、対象校の実践が残せているという側面もある。学校と大学という両輪がないと残っていかない。学校は日常的な教育活動を行い、大学がその活動を記録に取っていく。研究者は学校を動かすことはできないが、記録を取ること自体に、研究者が入ることの意義があるように思われる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 第3章において、学年会の特徴についての記載もあるとよい。

2.1.2 誤字脱字等を含めて文章を推敲すること。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1第3章「4. 総合考察」に観察した学年会の特徴についての記述を加筆した。
- 2.2.2誤字脱字等を含めた文章表現について推敲した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文では、日本の学校において教師の協働化やカリキュラム・マネジメントが求められ、児童の人格的側面の能力の育成が目指されようとしていることを指摘し、これらの実践に関する研究知見の必要性を主張している。継続的なカリキュラム開発の仕組みを有するカリキュラム・マネジメント実践校であり、学年会での教師の協働が図られている対象校においては、児童同士の話し合いなど社会的な文脈で発揮される能力の育成が目指されている。この点を踏まえると、対象校の実態を明らかにする本論文の目的は、求められる学校像の実現に向けた知見を提供できるという点で妥当であると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文の各研究は、対象校における教師の日常的な活動と、児童の学習成果を検討する上で明確に構成されている。本論文では、教師や児童の会話データ、児童を対象とした質問紙調査の各データの特性と研究目的に応じた分析方法が用いられており、その妥当性については各研究において明示されている。また、本論文における複数の個人の具体的な会話内容を記述した箇所では、教師や児童が特定されないよう個人情報に配慮した記述になっており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、対象校が有する継続的なカリキュラム開発を実現するための仕組みの中で教師の協働が図られていることを述べた後、社会的な文脈で発揮される児童の能力の育成を目指す対象校のカリキュラムについて整理している。これらの点に基づいて、対象校の学年会における児童の指導に関する教師たちの検討内容や、6年生の最終単元における児童の話し合い場面を分析して、6年間の指導を通じた成果として教師たちが検討していた姿を児童が体現していたことが明らかになった。以上の知見は、対象校におけるカリキュラム・教師・児童の実態についてデータをもって実証的に説明するものであり、明確かつ妥当なものである。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 先行研究によれば、小学校において学年の教師が集まる会議体である学年会では行事の打ち合わせなどが主となり、授業の振り返りなど教師の成長に関する話題はあまり話されない傾向にある。対象校においては、学年会は授業の協働的な計画や振り返りについて話し合う場として設定されているが、その実態は検討されてこなかった。本論文では、対象校の学年会の運営実態や学年主任の果たしている役割を検討している点で新規性があると判断できる。
 - 3.4.2 本論文では、児童が社会的文脈で発揮する人格的な側面の能力に焦点をあて、児童の話し合いに関するカリキュラムや教師の協働的な検討内容と、実際の児童の話し合い場面を Mercer（1996）のモデルを活用して検討し、対象校の

教師たちが目指していた状態と児童の話し合いの状態が同じであったことを実証的に記述した。この点は、児童の教科学力以外の能力に関する1つの評価軸を提供した意味で独創的である。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 学校組織における教師の協働化に向けた実践的知見が明確になっていないことが指摘されているが、対象校の継続的なカリキュラム開発を実現する仕組みにおいては、学年会で教師の協働が図られている。本論文の知見は、対象校における学年会の実態を明らかにすることを通じて実践的知見を提供した点において、学術的な意義があると考えられる。

3.5.2 本論文では、学校現場に求められる教師の協働化やカリキュラム・マネジメントについて、以前から継続的に取り組んできた対象校における教師や児童の諸活動の実態を、データをもって明らかにしている。このことは、求められる学校像を達成するための仕組みを検討する一助となるものであり、教育現場に対する貢献が期待され、社会的な意義があると考えられる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 人の学びに関して実証的に研究することは、人間科学における重要なテーマの1つである。本論文では、カリキュラム・マネジメント実践校を対象として、教師の協働の在り方と児童の人格的な側面に関する学習成果についての新たな知見を提供しており、人間科学に対して貢献していると言える。

3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・守一介，野嶋栄一郎（2018）児童の探索的会話を中心とした討議から生成される独自の卒業式の成立過程の分析 —館山市立北条小学校，卒業式第2部の事例研究—．教師学研究，21(1)：1-11
- ・守一介，野嶋栄一郎（2021）児童が発言できることと他の児童の発言を聴けることを目指した話し合い指導に関する検討内容の分析 —館山市立北条小学校1年生の学年会の事例研究—．人間科学研究，34(2)：31-43
- ・守一介，野嶋栄一郎（2021）小学校の学年会における学年主任の関わり方に関する事例研究．人間科学研究，34(2)：59-71

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上